一人暮らしの重度障害のある女性の焼死報道に接して

先月大分県内のユニバーサルマンションで、一人暮らしをする重度障害のある女性が焼死する事件があった。

マンションには１２世帯（うち１０世帯は障害者）と自立支援センターのＮＰＯの事務所も入居し、女性は同センターの職員だったとか。

７年前の交通事故で頚椎を損傷し一人暮らしする女性は、出火当時はベッドに寝ていて火事に気付き、１１９番し、階下の事務所にも連絡した。

出火当時、ヘルパーは買い物に出かけ、ＮＰＯの職員も研修会で留守だったとか。

消防隊は最初の通報から４分後に現場に着いたが、玄関や屋外階段の施錠で救助に手間取ったとか。

焼損はベッドとその周辺に限られ、「健常者であれば逃げ遅れることはまずなかっただろう（消防署）」とか。

福祉機器のメンテナンス云々の問題はさておき、この報道に接してウ～ンと首を傾げたのは、消防署は「１０世帯も障害者が入居していることは今回の火災で初めて知った。」という点。

「地域とは場所でなく、人の繋がり。」と思う自分だけに、障害者の自立支援センターの事務所が入居し、また、女性もそのスタッフだったというだけに、何かふに落ちないものを感じた。

日頃から、地域の人の繋がりを意識し、消防署等の関係機関へなぜ防災等の相談していなかったのだろうか。

障害者の自立支援センターも入居していただけに、地域との連携をどこまで具体的に意識して活動に取り組んでいたのかを、NPO の代表者に聞いてみたくもなる。

行政は後日、地域の障害者や介護事業所などを対象に防災説明会を開いたようだが、行政の指導を待つまでもない問題のように思う。

最近、一人暮らしの高齢者や障害者に対して地域住民が日頃どう具体的に支援していくかの取り組みも多く見聞しているだけに、残念な事故と思わざるを得ない。

当事者、家族、支援する関係者は、今一度、「地域で生きる、生活する。」とは具体的にどういうことかを再考し、「見えないことは、解らない。」の言葉もあるように、まずは遠慮なく地域の方々や関係機関に発信すべきことは発信する勇気ある姿勢を持って欲しいと思う。

そのことが、まずは既存の社会資源を活用し、「地域で自立した生活をする」という意味の第一歩を踏み出すことではないだろうか。

阿部幸泰　　（2007 年 5 月 15 日　記）